

福池 秋水 提出 学位申請論文

『首都圏方言と共通語の境界に関する研究

—漫画作品中の発話を対象に一』 審査報告

論文の内容の要旨

本論文は、首都圏方言と共通語の使い分けについて、主に漫画作品を題材として研究したものである。

日本語話者は、地域方言と共通語を多層に使い分ける言語生活を送っている。首都圏もその例外ではない。しかし、首都圏の方言には、他の地域と比べると、形式が共通語に近いこと、その地域の伝統的な方言が受け継がれないこと、話者自身の方言意識が低いこと、などの特徴がある。

首都圏方言は共通語と形式が近いため、首都圏方言の話者自身も、また、日本の他地域の人々も、首都圏方言と共通語を同一視している場合が多いと考えられる。それでは、首都圏方言と共通語の境界はどこにあるのだろうか。

また、日本語を母語としない学習者にとっては、教室で学んだ共通語に近いような日本語と、現実社会で接する日本語との間に隔たりがあることに戸惑い、コミュニケーションに支障が起きるケースもある。明確な支障をきたさなくても、共通語的な表現しか習得していない場合は表現の選択肢が狭く、細やかな心情や意図を伝えきれないのではないだろうか。

そこで、本論文では、首都圏方言話者が共通語と首都圏方言をどのように使い分けているかを研究することとした。

第2章では用語の整理を行った。標準語・共通語・首都圏方言という術語については研究者によって多様な見解がある中で、本論文では標準語は規範性を、共通語は地域を超えた共通性を最重要視した役割を持つ言語の体系を指す概念であると捉えることとした。また、首都圏方言は比較的新しい概念であるため、学界において定義が定まっているとはいえないが、本論文では、東京、神奈川、千葉、埼玉に住む人々の話しことばを首都圏方言と定義づけることとした。

多様な日本語教育における標準語、共通語の位置づけについて概観した。主に初級教科書において、首都圏方言の特徴の一つであるラ行音の撥音化がどのように扱われているかを調査した。その結果、日本語教科書ではこの言語事象がほとんど扱われていないことが明らかになった。

第3章では、日本語教育における標準語・共通語観についてまとめた。佐々木(2006)は、学習者の多様化等の要因により、教授法や学習観、学習者観に関して、1980年代と1990年代の二度にわたって大きな変化があったと述べている。この時期を境に、日本語学や日本語教育学教育研究者の論調に「標準語(正しい日本語)」を体系的に教えるべきであるという意見よりも、「コミュニケーションを重視した日本語」や「伝わる日本語」を志向する動きが見られるようになってきている。実際に現在よくつかわれている初級日本語教科書でも、「～してる」などの縮約形を取り入れたり、改定の際に名詞の否定文を「～じゃありません」から

「～じゃないです」に変更するなど、母語話者の使用実態を反映しようとする努力が見られる。

第4章では「新東京都言語地図」を利用して言語地図にあらわれた平成初期の首都圏方言の実態を分析し、ラ行の撥音化と「すみません→スイマセン」という首都圏方言の特徴が東京全域に広がっていることを確認した。その一方で、これらについては、どちらかだけを使用するという回答よりは両者を併用するという回答が多く、首都圏方言と共通語の双方を使い分ける話者が多いと思われることが明らかになった。このことから、これらの表現が首都圏方言では何らかの基準で使い分けられているということが予測された。

第5章では、研究対象とするメディアを検討した。会話に用いられる表現の研究の題材として、生の会話、ロールプレイ、映像作品、小説作品などと特性を比較した結果、本研究では漫画作品を使うことにした。作品中の発話に作者の母方言を避けるため首都圏出身の作家の作品を選んだ。長時間の時間軸の中で人間関係が変化する作品として、よしながふみ『きのう何食べた?』（2007年～ 小学館）を使用してラ行音の撥音化と終助詞を分析した。登場人物全般のラ行の撥音化の分析には単行本の1巻から5巻を使用し、特定の人物の人間関係の変容にともなうラ行の撥音化と終助詞の分析には1巻から14巻（既刊のすべて）を使用した。また、吉田秋生『海街diary』（2007年～ 講談社）を使用してスタイルシフトを研究した。

第6章では、日本語教材で扱われることのごく少ないラ行の撥音化に

ついて、漫画作品『きのう何食べた?』を題材に、作品中の使用実態を調査した。その結果、作中の登場人物はラ行の撥音化を使用するかどうかという点で個人差があった。使用する人物のなかでも、相手や場による細かい使い分けがあった。例えば主人公（弁護士）は、職場では撥音化を使用するが両親には使用しない。これは、上下関係による区別というよりは心理的な距離感や緊張感が影響していると考えられる。物語冒頭ではこの人物と両親との間には通常の親子関係とは異なるよそよそしさが描写されており、作者は、そうした人間関係のなかではラ行撥音化を使用しないことが自然だと考えていたことがわかる。

第7章では、人間関係の変容によってラ行の撥音化の使用傾向が変化するかを観察した。すると、ストーリー上で主人公の両親に対するわだかまりがとけた後、両親に対してラ行の撥音化が使用されていることがわかった。また、同じく両親に対する主人公の終助詞の使用傾向も分析したところ、関係が変化した前後では間投助詞的な用法の「さ」が増えており、これらの終助詞が心理的な距離感の近さを表すものであることが示唆された。一方、親族呼称についてはそのような変化が見られなかった。このように、ラ行音の撥音化や終助詞の使用は、人間関係の機微によって作者が使い分けられていると考えられる。

第8章では、関係の変容による首都圏方言の使用の変化について、他の作者による作品でも検証するために、『海街diary』を取り上げた。そして、作中の一組の登場人物（社会人）の関係が知人→友人→恋人と変容したことに伴う言語形式の変化を追った。

その結果、首都圏方言の特徴的な表現である縮約化などを使うかどうかは、単に上下や親疎だけでは言い表せないさまざまな要因で使い分けられていた。同じ場面でもスタイルシフトがたびたび起きている様子も観察され、首都圏方言と共通語の使用場面がはっきり分けられず、微妙な関係性や感情の変化によって揺れ動いている様子が観察できた。

以上の研究から、首都圏方言と共通語の境界は重層的連続的に存在しているということを確認することができた。

特に首都圏方言の場合は、言語形式が似通っているため、共通語と首都圏方言の差をスタイル差にとらえられる側面もある。首都圏方言の話者は、非常に改まった場で使われるような共通語から、極端にくだけた首都圏方言までのグラデーションが意識的・無意識的に使い分けている。関係性の変化や話題などによって首都圏方言と共通語の度合いは変化し、共通語に近い領域と、方言色の濃い領域の間を行き来しながら、話し手の微妙な心情や意図を表現している。首都圏方言はこのような豊かなバリエーションを持ち、日常のあらゆる場面の言語生活を支える方言であるということがわかった。

この研究結果は、日本語学習者に対しては、日本語の特性を示し、主体的な日本語の話し手となれるヒントを与えるために有用であると考えている。また、漫画を利用した研究でこのような結果が得られたことについても、今後ますます学習方法が多様化する日本語学習者にとって、漫画をリソースとした自律学習から首都圏方言話者の言語実態を学ぶことができるという可能性を示すものと考えられる。

また、今後多文化共生社会化が進む日本では、日本語を教室ではなく生活の中で習得していく人々も増加し、また、日本語教育を専門としていない母語話者でも、そうした人々に日本語を教えるような交流が増えていくと考えられる。そうした状況の中では、日本語母語話者に対しても、自身の話す日本語に意識的になり、必要があれば相手に合わせて調整していく能力が必要とされる。したがって、首都圏方言の話者自身にとっても、自分たちにも方言があり、共通語との使い分けを行っているのだという意識を持つことには価値があると考えている。

以上のように、本論文では、首都圏方言と共通語の境界について、考察を行った。その結果、首都圏方言と共通語の境界でどのような現象が起きているかをある程度解明できたと考えている。今後の課題としては、データの収集範囲や量、研究対象とする言語事象を拡大し、量的な分析の観点を取り入れること、また、特に日本語学習者に対する研究結果の還元方法として、日本語教育における具体的な実践を行った結果を報告していくことが挙げられる。このように、今回の研究はまだ発展の余地があるため、今後も研究を続けていきたい。

論文審査の結果の要旨

本論文は、共通語と首都圏方言の話しことばにおける会話のレジスターとスタイル差を、漫画作品の発話を材料としてその使い分けを明らかにすることを目的としている。申請者は長年にわたって日本語教育の現

場で日本語非母語話者に日本語を教授するという経験があり、日本語を外国語教育として教授する立場からの日本語分析が本論文の特徴であるといえる。いっぽう、日本語学では、日本語が母語である話者の発話をもとに、緻密な日本語分析を行う。そして分析手法として詳細な言語運用の分析や、厳密な述語の定義、事例の音環境の分析、資料選択の理由などが求められる。しかし、どちらの立場でも、現代日本語の話しことばの運用を分析し解明したいという研究目的は同じである。

日本語話者は、ほとんど意識せずに日常の言語生活の中でさまざまなスタイルを使い分けている。このような文体による使い分けを明らかにするには、日本語の話しことばの文体差の種類を明らかにする必要があるが、現代日本語の話しことばの文体差の実態は複雑で、現在でも多くの議論がある。現代日本語の書きことばの標準化については様々な基準が制定されているのに対して、話ことばとしての基準はそれほど明確ではない理由の一つには、そのような背景がある。いっぽう、日本語教育では、日本語を母語としない学習者に日本語の話しことばを教えなければならないという現実がある。

このような日本語学や方言学で行われている様々な議論と、現実として日本語を教えるという実際の運用場面との「折り合いをつける」という重要であるが、きわめて困難な問題への取り組みは、日本語教育の現場経験のある申請者であるからこそその問題提起であり、この問いかけは重要である。

現代日本語には、どの様な文体があるのかという話ことば全体的な視

点が必要である。話ことばの中には、限りなく書きことばに近い文体から、限りなく話ことばに近い書きことばまでの間に様々なバリエーションがある。そのユレ幅と変種があることを認識したうえで、どの様な文体として漫画の発話を選択し分析するのかを説明する必要がある。限りなく書きことばに近い話ことばには、ニュース原稿のような文体、日記の文体、脚本のト書きや、ドラマのナレーションの文体、漫画の中のある種の内言の文体等々がある。

日本語教育では、書きことばに近い文体が選択されてきており、本研究ではこれだけでは不十分であるという問題提起をする。昨今の伝達手段の急激な変化により、限りなく書きことばに近づけた話ことばとして、SNSの文体、ショートメールの文体などがある。申請者は、非母語話者に教授する日本語として、より話ことばに近い話しことばも教材として取り上げたいとしている。

第2章では、用語の整理を行う。話しことばには「標準語」「共通語」「東京語」等があり、近年は「首都圏方言」という用語も広まってきている。

日本語の話しことばの基盤となった江戸語が東京語となり、標準語としての地位を確立するまでの様々な過程については松村明氏などの日本語学研究に詳しい。国語教育や方言学では「標準語」はまだ成立しておらず、あるのは全国に共通して通じる「共通語」だけであるとされる。方言学では「方言」はその地域で話されている言語体系全体を指すから、例え、共通語や標準語や東京語方言で同じ言い方であっても、その方言

で用いられるなら、その地の方言であるとされる。その議論の中で東京方言を考えるなら、東京方言は共通語から首都圏方言全てを含むことになる。本論文では、現実として首都圏で話ことばとして使われている「首都圏方言」を、教材として選択しようと提案する。「首都圏方言」の丁寧なスタイルは共通語に近く、日常のくだけた文体に首都圏方言を位置づけている。日本語教育の教材として、より話ことばに近い文体がほとんど選ばれない現状についての指摘は新鮮である。外国語教育としての日本語が選択すべき話ことばに近い文体の中で、「ワカンナイ（分からない）」、「ソ نداケ（それだけ）」のような、ラ行rが撥音化する現象のみに着目し選択したのかについての詳しい説明がほしかった。

第3章では、日本語教育の立場からの標準語・共通語を整理し、非母語話者に教えるべき日本語の話ことばの質の変化が説明され、より話ことばに近い文体が選択されるようになってきたことが非常に明快に示される。

第4章では、『新東京都言語地図』（2018）の「すみません」と「わからない」の語幹末のrの撥音化の分布図の分析を行う。「すみません」を「スイマセン」という回答が高年層、青年層共に優勢であることから、スミマセン→スイマセンの東京語の変化を予測している。しかし、先行研究などから東京方言として「スイマセン」が広く使われ、共通語化で「スミマセン」が勢力を広げている可能性がある。場面による使い分けもあるが言語地図の分布だけでは、これ以上解釈はできない。「分からない」を「ワカンナイ」「ワカンネー」という回答が高年層・青年層と

もに東京都下全域に分布しているが、これも文体差や場面差による使い分けがあると考えられる。

第5章では、漫画の発話をとり上げる意義について述べる。6章以降は、本研究の中心となる。「漫画」の発話の中で生活語としての現代日本語の話しことばの分析に首都圏方言が選択される理由を、他の媒体と比較し、その得失を比較した図表は明快で理解しやすい。扱う漫画作品は、首都圏出身の作家で、現代を扱う物語で、作品の中に様々な役割の登場人物が現れることという条件を課している。その結果、漫画の発話に現れるステレオタイプと役割語としてのキャラクターの性格は非母語話者の日本語学習に有益であると主張する。しかし、漫画の持つ特性を活かしながらも、提示のしかたにコントロールが必要であるという指摘は教育現場からの指摘としてうなずける。

第6章は『きのう何食べた』という漫画の発話の分析である。具体的分析から、ラ行の撥音化は用例数が少なく、1～5巻で151例である。登場人物の心理的距離によってrの撥音化の出現度に表れることを指摘する。また、r→撥音化という現象は同じでも、ラ行動詞語幹末rの撥音化と、「生きてるのかよ」→「生きてんのかよ」、「それでは」→「そんじゃ」では、もとの形態と形態の持つ条件が異なる。どの様な発話で、r→撥音化が起きるかを整理して心理的距離の変化する過程を示すことができれば、さらに興味深い分析となったであろう。

漫画の発話では場面が限られるため全環境が揃えられないが、それらの結果は、漫画の発話から首都圏方言での心理的距離の差を明らかにで

きる可能性を示唆する。

第7章は、漫画の発話から終助詞の使用頻度を通して人間関係の親疎をはかろうとする。話し方コーパスを使うより、登場人物の意図がはっきりしているのも、分析対象としては分析しやすく、結論も妥当で優れている。しかし、論文にも指摘されているが状況に応じて変化する人間性に相応しい語の選択がなされるという結論に至るまでの資料が十分とは言いがたいという弱点がある。さらにデータを増やし詳しい分析が期待される。

第8章も具体的な作品『海街 daiary』の分析から人間関係の変化を明らかにしようとする。ここでは「です。ます体」を共通語、それを使わない文体や、連母音の融合、人称代名詞の語形の選択、俗語の使用、終助詞の語形選択が首都圏方言と捉えている。

物語の発話のスタイルシフト変化が人間関係の変化を反映しているという指摘はたいへん興味深い。「です・ます体」の共通語から首都圏方言のくだけた表現への変化は読み手にとって分かりやすく、人間関係の変化を表す指標として、日本語学習者にも分かりやすいという指摘は卓見である。漫画の発話のスタイルシフトを理解するには日本の文化的背景の知識が必要であるため丁寧な説明が必要となる。今後、ここで示された結論の客観性を担保するために他の作品での調査研究が課題となろう。

本論文が提案する漫画の発話によるスタイルシフトやレジスターに関する考察は、現代日本語の分析に有効な素材であるという指摘は、漫画を題材とした教材としてはユニークな観点からの提案である。

本論文は、多くの新しい試みと分析から興味深い考察が展開されている点が高く評価できる。漫画の発話からレジスターやスタイルシフトを明らかにする発想は、日本語教育にも日本語学にも面白い提案である。ただ、題目の「首都圏方言と共通語の境界」の議論に関しては、やや不整合感が残る。これは、先行研究の「共通語」と「首都圏方言」の定義の曖昧性に由来するところが多い。いっそ「首都圏方言」は首都圏に生活する方言話者の生活語であるから、現代日本語の話ことばは全て方言と捉える方言学の定義を踏まえ、ここでとり上げた漫画の発話はすべて「首都圏方言」と捉えた方が合理的な説明ができるのではないだろうか。「首都圏方言」は、限りなく書きことばに近い文体も可能であり、「共通語」の書きことばとしても表記することもできるし、乱暴な文体の話ことばも可能である。漫画の発話を使った首都圏方言のレジスターとスタイルシフトの研究であれば、本論文の目的にも沿う内容となっていたと思われる。ただ、日本語学・日本語教育の立場で「方言を教える」という表現は支持されにくいかもしれない。

いくつかの修正と今後の課題が残されているが、申請者が目指した「共通語」「首都圏方言」「話ことばに近い日本語教材」という、日本語学と日本語教育をつなぐ話しことばのスタイルシフトという研究は重要で、日本語学と日本語教育の発展に貢献する論文である。

よって「首都圏方言と共通語の境界に関する研究—漫画作品中の発話を対象に—」は博士（文学）の学位を授けるのに相応しい論文と認めるものである。

平成 30 年 12 月 25 日

主査	國學院大學教授	久野	マリ子	㊟
副査	國學院大學教授	小田	勝	㊟
副査	國學院大學教授	吉田	永弘	㊟
副査	高知大学名誉教授 國學院大學兼任講師	久野	眞	㊟

福池 秋水 学力確認の結果の要旨

下記4名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成30年12月25日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	久野	マリ子	㊞
副査	國學院大學教授	小田	勝	㊞
副査	國學院大學教授	吉田	永弘	㊞
副査	高知大学名誉教授 國學院大學兼任講師	久野	眞	㊞